

## 銃を持たなかつた矜持

「矜持」という言葉があります。あまり頻繁には使われる言葉ではありませんが、その意味するところは、「自尊心」や「プライド」に近いものでしょうか。しかし正確には、そこに「抑制」という意味合いが含まれた言葉です。つまり、自信とともに拡大しようとする自己の「欲求」を見つめ、自尊心を保ったまま静かに自分を抑える力を持っている、というような意味です。

昨今の日本から、この「矜持」が失われたような気がしてなりません。儲けのためなら平気でデータを捏造する大企業の数々。見え透いた嘘でも、数の力で押し通そうとする政治家や官僚。勝つためなら手段を選ばず、反則行為をも厭わない大学のスポーツチーム。満員電車で平然と優先席に座る健康そうな若者。日本人は、いったいどうなってしまったのでしょうか。

一見関係ないようですが、星野道夫はアラスカの大自然の中を行くとき、熊の恐怖を感じながらも銃を持ちませんでした。時に無謀とも映るその行動が批判の眼差しに晒されようが、決して銃を持つとしませんでした。その時の心境を、『アラスカ 光と風』の中で次のように述べています。

いつか、ライフルを持つて長期の撮影にはいったことがある。じつに安心だった。けれども、どこかで自分の行動がとても大胆になっていったような気がする。最終的には銃で自分を守れるという気持ちだが、自然の生活の中でいろいろなことを忘れさせていた。不安、恐れ、謙虚さ、そして自然に対する畏怖のようなものだ。

『アラスカ 光と風』「北極への門」(『星野道夫著作集1』124頁)

また、映画監督 龍村仁が撮ったとあるインタビュー映像の中で星野は次のようにも話しています。

どこか近くに熊がいて、いつか自分が殺られるかも知れない、と感じながら行動してい

る時の、あの、全身の神経が張りつめ、敏感になりきっている感覚が僕は好きです。あるインディアンの友人が言ってたんだけど、人類が生き延びてゆくために最も大切なのは、「畏れ」だって。僕もそう思います。我々人類が自然の営みに対する「畏れ」を失った時滅びてゆくんだと思うんです。今僕たちは、その最後の期末試験を受けているような気がするんですよ。

映画『地球交響曲 第三番』「星野道夫」

星野道夫は銃を持つことによって精神が弛緩し、と同時に自分の中から大自然への畏敬の念が薄れてゆくのを恐れました。自分が強くなったと錯覚し、上から目線で自然の営みを観てしまうことを極端に嫌ったのです。人間など及びもしない自然の持つ圧倒的な雄大さを表現するとき、この上から目線の持つ傲慢さが無意識のうちに自分の目を曇らせてしまうことを、彼は知っていたのでしょう。銃に守られたなら、もしかしたらもっと大胆な迫力あるシーンを撮れたかも知れない。しかし彼は安全が確保された中で、自分の欲求を拡大させて大胆に振舞うことを嫌ったのでした。何故なら、自然界の動物たちは常にこの危険、恐怖の中で生を営んでいる訳で、自分だけ安全の中にいるのは自然に対してフェアじゃないと感じたか

らでしよう。先の映像を撮影した龍村仁は星野道夫のこの行動について、次のように述べています。すなわち、

深夜、熊のいる森で、銃も持たずたったひとり野外テントで眠ること、それは他者がどう批評しようと、星野自身がはつきりと自分の意志で選びとっていた生き方だった。そこには、星野道夫を「星野道夫」たらしめた痛ましいまでに誠実な生き方がある。

『地球交響曲第三番 魂の旅』26頁

僕もこの考えに、まったく同感です。銃を持たないで、つまり、あくまでも自然と対等の立場で向き合おうとする彼の誠実さ。この誠実さこそが、星野道夫によって表現された情景が私たちを魅了する根源になっているのです。それはつまり、星野道夫が自らの命を賭してでも貫き通した「矜持」なのでした。

かつて日本人も、素晴らしい矜持を持って仕事をしてきました。精緻を極める匠の業と、矜持をもった誠実な物作りが生み出した「Made in Japan」。それは世界に通用する品質保証の代名詞でした。損得よりも、まずは「良いモノ」を作るという信念。そこに、「手抜き」や「こ

まかし”など入る余地はありません。だからこそ、堂々と世界に誇れる「Made in Japan」だったはずでは。では、日本人がかつて持っていた矜持は今や完全に消えてしまったのでしょうか。思い出すのは、東日本大震災の時の被災者たちの行動です。危機的な状況に陥った時、人間はその本性を現わすと言います。震災直後、停電で真っ暗になったコンビニのレジに、黙って並んでいた買い物客の長い列。窮地に陥ってなお、我先にと争って物を手に入れようとしぬ日本人のこの行動は、世界の称賛を浴びました。日本人にとっては当たり前前の行動でも、世界から見れば驚愕の光景だったわけです。そうです。危機的な状況下でとったこの行動こそが、DNAに深く刻まれた日本人の本質だと私は思います。日本人の矜持は今も生きています。しかし物質的な繁栄こそが重要だとする価値観の下、今、少し忘れているのかもしれません。今こそ、この「矜持を持つ」という価値観を思い出す時でしょう。共生の未来を創るために。銃を持たなかった星野道夫が、それを思い出させてくれているような気がします。